

最澄の教え「隅を照らす」



伝教大師・最澄の肖像。天台宗と真言宗を代表とする平安仏教は、学術的な要素が強い南都六宗とは異なり、加持祈祷を行う密教が導入された

鎌倉時代に開宗された多くの仏教の原点であり、日本の仏教に大きな影響を与えた天台宗。その総本山が、伝教大師・最澄が建立した比叡山延暦寺である。最澄が伝えた「隅を照らす」という教えを心に留め、多くの先人たちが訪れた比叡山延暦寺を参詣した。

神の宿る山に建てられた天台宗の総本山

「おほけなくうき世の民におほふかなわが立つ袖にすみぞめの袖」という和歌をご存じだろうか。小倉百人一首に収録されている前大僧正慈円の一首だ。慈円は平安末期から鎌倉初期の天台宗の僧で、38歳の若さで62代天台座主となった。その意気込みを表現した歌で、「身分不相応に天台座主となった私であるが、荒れた世の中を墨染の法衣で覆って、心安らぐ世に救済したい」という内容である。慈円はほかにもこんな歌を残している。

『世の中に山てふ山は多かれど山とは比叡の御山ぞいふ』

古来、比叡山は神の宿る山と崇められていた。古事記には大山咋命が比叡山に延暦寺が建立されたのは788年。滋賀郡古市郷（現・大津市）出身の僧・最澄が平城京での修学を中止して帰郷し、比叡山にもって、鑑真によって中国からもたらされた天台典籍の研究に没頭した。最澄は「六根相似の位に達しなかつたら、絶対に山から出ない」と誓っていたという。最澄は比叡山の東塔北谷に「乗止観院」という小さな草庵を建て、薬師如来を祭り、一切経を繰り返し読んだ。一乗止観院は後に比叡山寺と名を変え、延暦寺の本堂である根本中堂に発展していく。また、薬師如来の宝前に掲げた不滅の法灯は、織田信長の兵火で延暦寺が消失した時も、分灯してあった山形県山形市山寺の立石寺の火を移し、絶えることなく灯され続けている。

804年、最澄は留学生として唐に渡る。中国の天台山や龍興寺で修学し、日本に多くの典籍を持ち帰った。帰国した最澄は、806年に天台宗を開宗。人々を幸せに導くためには人材の育成が大事と考え、日本各地を旅して教えを説いた。延暦寺には、最澄の教えを学ぼうと、多くの人材が集まったという。



国宝の根本中堂。延暦寺は東塔、西塔、横川にそれぞれ中心となる仏堂があるが、その中でも最大の仏堂である

多くの人の心を動かし「隅を照らす」という教え

延暦寺に入山すると、「隅を照らす」と書かれた大きな石碑を目にする。この言葉は、最澄の著書「山家学生式」が出典で、今日まで大切に伝えられてきた天台宗の教えである。

「人は懸命に生きれば、隅を照らすことができる。一人ひとり小さな灯でも、たくさん集まれば日本中が明るく照らされる。皆の幸福のために、個々が今できることを一生懸命がんばりましょうと、最澄は伝えていきます」と延暦寺参拝部の小林福一事務長。その教えを真摯に受け止め、隅を照らせるように精進した宗徒たちの中には、数多くの名僧がいる。最澄と同じく唐に留学して多くの典籍を持ち帰り、天台宗の発展に尽くした円仁と円珍、僧の規律を正し、学問と修行を興隆させた良源など比叡山に尽くした僧もいるが、延暦寺を離れ、新たな宗派を開宗した僧もいる。

浄土宗の法然、臨済宗の栄西、曹洞宗の道元、浄土真宗の親鸞、日蓮宗の日蓮など、延暦寺で学んだ僧によって、鎌倉仏教の多くが開宗された。現在も残るこれらの宗派のルーツは天台宗にあり、教えの源は最澄の「隅を照らす」なのだ。それを物語るエピソードがある。

1200年の長い歴史を超えて先人たちが積み重ねた思い

1986年、ローマ法皇の呼びかけでさまざまな宗教者が集い、世界平和を祈るイベントがイタリアのアッシジで開催された。その精神を引き継ぎ、翌年から毎年延暦寺で行われているのが「比叡山宗教サミット」である。仏教のほか、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、ヒンズー教、シーク教、神道、儒教など、国を

超えてさまざまな宗教が参加し、世界平和を祈願するもの。比叡山仏教サミットは毎年8月に開催され、今年27回目を迎える。

二年を通じてさまざまな行事がありますが、年末年始は修正会などの行事があり、毎年多くの人が訪れています。また、祖師先徳顕仰大法会『慈覚大師1150年御遠忌』も最終の年になり、期間中は法要のほか、国宝殿で祖師関連の特別展を予定しています」と見どころを話す小林事務長。さらに、写経や坐禅といった修行体験も延暦寺会館などで常時開かれており、企業の研修などで利用されている。

「比叡山は延暦寺ができる以前から、霊山として崇められていた山で、最近パワースポットとして多くの人が訪れるようになりました。「隅を照らす」という言葉の意味を改めて考え、自分に欠けていたものを見つめ直す機会にしていただけなんです」と小林事務長は締めくくった。

1994年、延暦寺は「古都京都の文化財」の一つとしてユネスコ世界文化遺産に登録された。1200年以上を経た長い歴史の中で、多くの先人たちが比叡山を歩いている。多くが「隅を照らす」という最澄の教えを拠る所に、明るい世の中にしたいと努力したのだろう。比叡山にこめられたその思いを感じながら、これまでの自分を振り返り、明日へと進む糧にしたい。



1 東塔の大講堂。織田信長に焼き討ちされた後、いち早く復興されたもののひとつ 2 戒律を授ける場所である大乗戒壇院堂。戒壇の設置は最澄の悲願だったが、生前は認められなかった 3 根本中堂内にある不滅の法灯。天台座主とは不滅の法灯の継承者を指し、最澄から法灯を受け継いだ義真が初代天台座主である



現在も残る
宗派の教えの源、
最澄の「隅を照らす」



4 第27回比叡山宗教サミットの様子。さまざまな宗教を信仰する人々が集い、平和を祈る



5 修正会のひとつとして行われる追儺式（ついなしき）。人間の心の悪業である、むさぼり、怒り、ねたみを表す鬼が舞い、僧侶によって改心する祭事だ



6 延暦寺の修行は厳しく、中には7年の歳月をかけて行う千日回峰行などもあるが、延暦寺会館と居士林研修道場の2カ所で、写経や坐禅などを短時間で体験できる



7 宮澤賢治の歌碑。1921年4月、賢治は父とともに延暦寺を参詣し、短歌を歌った。歌碑はその75周年を記念して建立された



延暦寺参拝部の小林福一事務長